

たまのよこやま



発行

財団法人 東京都生涯学習文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
多摩市落合1-14-2
☎ 042-373-5296

東京都埋蔵文化財センター報 No. 51

平成13年2月28日

<http://www.tef.or.jp/maibun/>



とうきょう親子ふれあいキャンペーン風景 平成12年10月28日(土)

火おこしの楽しさ

総務課長 太田 寛

既に昨年の話になるが、10月28日(土)の午後、当センターの遺跡庭園で行われた「とうきょう親子ふれあいキャンペーン—火おこし体験—」に妻子共々参加した。この企画は、古代人の暮らしの一端を親子で体験してもらおうと、平成11年度から始めたもので、今回が3回目。この日も、応募してきた22組の親子が、古式に則ったやり方で、火おこしを楽しんだ。

火の発火には、「舞いざり」という当センターのシンボルマーク(この誌面右上に印刷されている)にもなっている木製のコマと弓を組み合わせた形の道具を使う。発火方法を簡単に述べると、まず、コマの心棒の先を

発火させたい木に強く押し付け、次に、地面に平行になっている弓の柄部分を手で上下に連続して動かし、心棒に弓のひも部分を絡ませることで、心棒を早く回転させて、摩擦熱により発火:となる。

我が親子も、職員の模範演技(?)の後、見よう見まねで、トライしてみたが、なかなか思うようにいかなかった。特に、弓の柄部分を一定時間継続して上下運動し続けるコツを呑み込むのに時間がかかった。でも、職員による手取り足取りの指導で、汗だくになりながらも、次女も含め、なんとか、一家全員が発火に成功できた。

帰路、小4の長女が、「埋蔵文化財センターって、お宝はなかったけど、大昔の人にとっては、苦労して付けた『火』が、何よりの宝だったかもしれないネ」とつぶやいた。

久々に、家族4人で力を合わせて、ひとつのことを成し遂げたという充実感にひたることができたのを、今でも鮮明に記憶している。

遺跡だより ⑤9



島屋敷遺跡(全景)

江戸時代になると柴田勝家の孫にあたる勝重が陣屋を構えたといわれ、平成8・9年度の調査で見つかった建物跡と池の跡などがそれにあたるものと考えられます。

柴田勝重は当地で寛永9年(1632年)に亡くなり、近くの大原山春清寺に墓地があります。柴田家は3代にわたってこの地を治めますが、元禄11年(1698年)の知行替えて三河に転封になり、その後この地は幕府の直轄地となりました。

島屋敷遺跡は、三鷹市南東の新川5丁目に位置し、現在都市基盤整備公団の新川団地が建てられています。

新川団地は敷地面積が約10万㎡あり、東京ドームが2つ入っても余るくらいの広さがあります。

この団地の建替工事に伴う遺跡の調査は、平成4年から断続的に継続され、調査終了区域には新しい団地が整備されつつあります。

遺跡を取り巻く地形は「島屋敷」という名称のように周囲を低湿地で囲まれた島状の小高い丘になっています。江戸時代に書かれた「新編武蔵風土記稿」によると、戦国時代には武蔵村山党に属する在地の武士金子氏がこの地に屋敷を構えたとの伝承がありますが、その痕跡ははっきりしません。

今回の調査は、平成11年6月から開始し、平成13年1月末日をもって終了しています。調査対象面積は3万8千㎡にも及び、今まで調査された部分を総合すると、島屋敷遺跡のほとんどの部分を調査したことになります。検出された遺構・遺物の主なものは「島屋敷」に関連する中世・近世に属するものですが、このように中・近世の遺跡が広く調査されたのは、近世の大名屋敷以外では例のないことです。そして、地形的にも特徴のある「島」の大半を広域に調査できたことよって、いろいろなことがわかりはじめてきました。

中世の遺構は、金子氏の屋敷があったとされる戦国時代のものが大半ですが、屋敷そのものは発見されませんでした。そのかわり墓とみなされ

ている地下式坑のほか、六道銭をともなう土坑や、茶毘を行ったとみられる焼け土や炭が詰まった土坑、井戸跡や、柱穴の跡などが集中して検出される箇所が、ちょうど島状の丘の裾部を巡るような形で分布しています。あたかもこの「島」全体が墓域であるかのような傾向があります。



墓域群

鉦鼓

発見された遺物には、陶磁器・土器などのほかに、供養塔の一種である板碑や、銭など墓に関連するものが見られます。また、出土品としては珍しい青銅製の鉦鼓(紐でつりさげ、たたいてならす鉦かね)・仏具の一部と見られる台座も出土しました。鉦鼓(右図)の出土は全国的にも例が少なく、東京都内では初めての発見です。



近世の建物

近世になると、先述の柴田氏の陣屋が「島」中央に建てられていて、今回調査した部分は、低地部にあったため、当時の畑跡、水田跡が検出されています。そのような中でもどこどころに建物跡や井戸がまじっており、柱の規模からみるとかなり立派な建物が構築されていたとみられることから、水田や畑を耕していた人たちの居住地があったと推定されます。

発掘調査が終了した現在は、報告書作成作業をしています。発掘調査中に得た所見に加え、過去の調査結果と総合してより詳細な検討を行う「島屋敷」の当時の姿を明らかにしていきたいと考えています。

(武笠多恵子)

文化財講座 <41>
大江戸掘りもの帖 ~十八~

今回は一枚の絵図が謎を解く鍵になることを見てみたいと思います。昨年の尾張藩上屋敷の調査地点は、屋敷の北東部の「長屋」および「奥向き」にあたる場所でした。「奥向き」とは藩主の奥方や女中・子女が居住する場所、この中には長局と呼ばれる女中達が居室する長屋があります。この尾張屋敷の遺構の下に屋敷が拝領される以前の遺構が眠っていました。

この地点の旧地形は、南北方向に傾斜する斜面地になっており、尾張屋敷はこれを数m埋め立てて平坦な屋敷地に造成していることがわかりました。尾張以前には、南北方向に直線状に掘られた溝(幅4m、底面は平坦)と、

この西側に併行して斜面を段ぎり、平坦な削平面を造っていました。この削平面には桁行39間以上×梁間3間の長屋と思われる掘立柱建物(数棟が連続か?)が見つかっています。では、これらの遺構はどのような性格のものなのでしょうか? 尾張屋敷は明暦2年(1656年)に拝領されますが、それ以前の姿を伝えるものとして「正保年間江戸絵図」「正保

元年(1644年)があります(左図)。



〔波谷葉子 1992『市買』No.6〕に加筆

太線は尾張藩が後に領有する範囲で、網部分が今回の調査地点になります。これによると尾張藩は大名・旗本の屋敷や与力・同心たちの組屋敷及び寺院などを移転させてこの地を拝領したことがわかります。絵図との位置関係から調査は「服部与十郎下屋敷」と「松平大隅与力同心」にまたがる地点にあたるかと考えられます。発見された溝は絵図の屋敷境の道(区画する溝)にあたり、建物跡は「松平大隅与力同心」に関わるもの

ではないかと現在考えています。しかし、絵図の年代である正保元年から尾張屋敷拝領の明暦2年までの10数年間にどのような変化があったものか検討せねばなりません。いずれにしてもこの一枚の絵図は、

保存科学室(こぼれ話(十五))

出土遺物にみられる

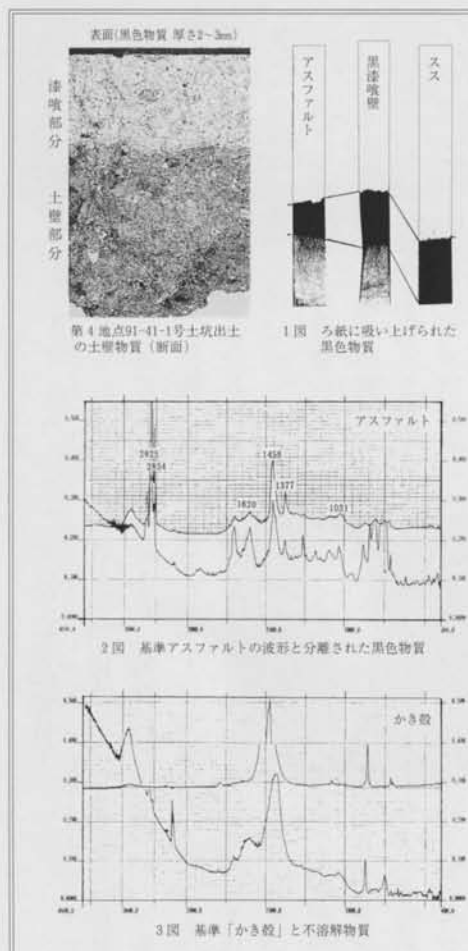
黒色物質について(5)

前回報告した黒漆喰壁表面の黒色部分を四塩化炭素の溶剤に入れると溶剤に溶けて黒い液になりました。そこで細長く切った「ろ紙」の一端をこの液に浸けると一定の高さまで吸い上げられた黒色物質(上層)と不溶解物質(下に沈澱)に分離することがわかりました(1図)。

明暦3年の大火(1657年)以前の江戸の姿を伝えてくれるとともに、調査にとってもヒントを与えてくれる重要な資料です。さて、「掘りもの」のなぞ解きは始まったばかりだ! (斉藤 進)

この方法はクロマトグラフ法と呼ばれ、混合物から一定の組成を分離する方法です。上層の黒色部分をFT-IRで測定すると2図下のような波形が得られ、アスファルトの波形と一致しました。

また、下に沈澱した不溶解物質を測定すると3図下の波形が得られ「かき殻」とわかりました。これらの結果から表面の黒漆喰は、「かき殻」の粉末とアスファルトの混合物でぬられていたことが推察されました。(門倉 武夫)



文化財講演会〔縄文を考古学する〕 2月15日(木)



小林達雄國學院大学教授による「縄文人の見た風景」と、当センター山本孝司副主任調査研究員による「縄文ネットワーク」の講演を都民ホールにて行いました。
242名の参加がありました。

親子ふれあいキャンペーン
火おこし体験・「縄文の村」探索

10月28日(土) 22組の親子、70名の参加がありました。(巻頭写真)

創立二十周年記念行事



巨大縄文土器の野焼き 11月18日(土)

142名の見学者に見守られる中、高さ1m、重さ50kgの縄文土器2個の焼成が行われました。
結果は、残念ながら割れてしまいました。修復の上、モニユメントとして設置する予定です。

文化財防火デー消防訓練

平成13年1月26日(金)
東京消防庁多摩消防署の協力を得て、消火訓練を行いました。

文化財講演会

第四回、平成12年11月11日(土)
市毛勲早稲田実業高校教諭による講演「古代朱の風景」と、映画「飛鳥―その風土と文化」を上映しました。参加者は122名でした。

第五回 平成13年1月17日(水)
当センター栗城譲一調査研究員による講演「古代のニュータウン開発」と、映画「多摩ニュータウンのあゆみ」を上映。参加者は130名でした。
第六回 2月7日(水)

当センター齊藤進主任調査研究員による講演「江戸・東京・人」と、映画「東京―大江戸の春」を上映。参加者は102名でした。

東京都遺跡調査研究発表会

12月3日(日)に武蔵野公会堂にて開催されました。

当センターからは、丹野雅人副主任調査研究員が、八王子市堀之内No.72遺跡の調査成果を発表しました。

ミニ現地説明会

関町分室 地元住民説明会

11月27日(月)参加者は23名

市ヶ谷北分室 生涯学習文化財財団

研修 1月23日(火)参加者は31名

内藤町分室 新宿高校関係者説明会

1月9日(火)参加者は170名

ヒスイ製品発見!

八王子市堀之内No.72遺跡の住居跡2軒から、縄文時代中期のヒスイ製品2点が新たに発見されました。



1点は大珠と呼ばれる「かつお節」形をしたもの、もう1点は不整形のもので、ヒスイの保持は、本遺跡が縄文時代中期の大集落として、地域間交流ネットワーク上のリーダー的な人物の存在をうかがわせるものといえます。

分室の開設

11月以降、新規の分室です。

戸吹分室

千葉基次係長、

新宿分室

竹田均、岩橋陽一

甲斐分室

甲崎光彦係長、

山口分室

山口慶一、小島正裕、

武井分室

武井利道、西山博章

比田分室

比田井民子係長、

今井分室

今井恵昭、小松眞名



古紙100%配合の再生紙
を使用しています。